富山短期大学紀要第 53 巻(2017.9)

論　　文

リズム運動遊びの指導法と教育的効果に関する研究
―バンブーダンスを使った事例を通して―

A Study on the Teaching Method of Rhythm Play and its Educational Effect
―Through the Case Using Bamboo Dance―

大　森　宏　一
OOMORI　Kouichi

【要約】

子どもの体力低下が問題になって久しい。本研究は、保育現場での子どもの運動遊びを想定した保育者養成の場面において研究を行ったものである。ここでは、養成課程での授業として創作活動を伴うリズム運動遊びであるバンブーダンスを用いてその指導法と教育的効果について調査をした。

今回の研究では、保育現場を想定したバンブーダンスの授業において、学生の学習シートなどの記述とビデオ撮影の記録から多元的に解釈し調査を行った。

本調査では、学習プログラムの過程において、身体的な発達だけではなく情緒面や社会性を培うことができるものであるということがわかった。またバンブーダンスの創作活動では失敗やミスをした場面においても楽しんで学習できることが明らかになった。

キーワード

子どもの体力低下　リズム運動遊び　　バンブーダンス

1.　はじめに

近年、子どもの運動能力低下、体力低下が問題となっている。森 [1] は、幼児の運動能力低下について 1986 年から下がり始め 1997 年以降は低下したままの状況が続いているとしている。このような中で、文部科学省は 2012 年に「幼児期運動指針」を策定し体力低下に歯止めをかけるための取り組みをしているが、幼稚園における運動には量と質の問題が依然としてあるように思われる。

杉原ら [2] [3] の研究によると、幼稚園において、専門の体育指導者が運動指導を多くしている園の子どもほど運動能力が低いという研究結果がある。そして、専門の運動指導をおこなっていない園ほど子どもの運動能力が高いことが報告されている。

これは、専門の運動指導が特定の活動に限られていることが挙げられている。そしてその特定の技術の向上を図ることを目的として行われていること。さらに運動の説明や待つ時間の多さから実際の活動時間が確保されていないことなどが挙げられている。[4]

おおもり　こういち（幼児教育学科）

また、私立園ほど技術指導重視の傾向があるとし、その理由として園の特徴や園長の強い思いやこだわりなどの保育方針があるとしている。しかし保育者自身も実践を評価しているという結果が出ている。

さらに準備運動についても、これから運動するにあたっての動機付けとしてではなく形式的に行っていることがあるとしており、それらのことが保育者の子どもに対する発達を十分に理解していないことの表れであるとしている。

吉田 [5] は専門的な運動指導者が提案した遊びがその時間だけではなく日常の保育の中で何度も繰り返してこそ子どもの遊びといえる、として運動遊びを行う保育者の意識を問題としている。また技術指導偏重の保育者の傾向として養成校でとてもよく学んだ群で早期からの運動技術志向が高い傾向があるとして養成段階での指導内容にも課題があるとしている。

幼稚園での運動指導者は、保護者や保育者の満足度と子どもの満足度において前者の満足度を優先している点と、技術志向に偏る点により技術の上達に重きを置いた指導をしていることが原因のようにも思われる。

確かにできなかったことができるようになることは、子どもの意欲を高めることにつながる。現に子どもに少しのアドバイスにより上達したり、できるようになった場合は、保育者や指導するものにとっても子どもの憧れになったり、その後の保育が行いやすくなる場合も多い。

しかしやりたくないことを無理やりさせることは遊びではないし、運動の技術面の発達に偏ることによる情緒面、知的面、社会性などの発達の弊害を考えると遊びを通しての指導が原則であることを再検討したい。

また、前橋 [6] は、運動遊びと体育遊びの違いを教育的目標の有無にあるとし、自由に遊ばせるだけの運動遊びと子どもの特性を知り情緒面、知的側面、社会面などの発達を考慮した体育遊びを分けて考えている。

子どもの体力低下や情緒面でのさまざまな問題を考えるとき、幼児期の運動遊びは子どもの身体面の発達だけにとらわれないことと、保育者が行う遊びは前橋の言う体育遊びであることが重要であると思われる。

吉田 [5] の指摘にもあるように、保育施設での自由遊び、運動遊び、体育遊びは園の方針や保育者の考えにより偏りがあるように思われる。子どもの体力低下を考えたとき、体力の向上だけではなく子どもの全面的な成長として考える必要がある。これは、現場での教育・研修だけではなく、養成校での養成段階から考えなければならいことであると思う。

養成校においてさまざまな遊びを体験すること、子どもと遊ぶレパートリーを増やすことと同時にその遊びを行うことにより子どもの身体的な成長と同時に情緒的、社会的な成長を見据えた援助や指導はどのようにあるべきかを盛り込んでいく必要があると思われる。

2. 目的

今回の研究は、保育者の養成課程における学生の学習プログラムとして創作活動を伴うバ

ンブーダンスを教材として授業を行い、以下の点において効果があるかを検証することを目的とした。

①学習過程において情緒面と社会性が培われるものであり、運動遊びが子どもの身体面のみの発達にとらわれるものではないことの理解ができること。すなわちプログラムの過程や終了時において運動技術の達成度だけではなくその他の面において気づきがありそのことを子どもへ提供するときに重要な要点として考えられること。

②学習プログラム自体が子どもの遊びとして有効であること。

③学生自身がプログラムを楽しみながら（遊びながら）学習できること。

3.　研究方法

保育者養成課程の授業において、バンブーダンスを行い学生の動きをビデオ撮影し考察をした。また学習シートと振付のパートシートを活用して学習者の記述を多元的に解釈し考察をした。

期間：平成 29 年 5 月 20 日～6 月 9 日

対象者：T 短期大学　幼児教育学科　2 年生　88 名

場所：教室および体育館

ビデオ撮影は、筆者が行った。

研究倫理として：ビデオ撮影については、研究でのみ使用することを伝えたうえで撮影を行った。

4.　学習教材について

今回の研究では、バンブーダンスを学習教材とした。

バンブーダンスは、フィリピン中部のビザヤ地方、レイテ島のダンスで、テニクリンという名前の鳥が農夫の罠をかいくぐりながら飛び回る姿を模したものであると言われ、踊り手は平行に並べた開閉する二本の長い竹の間を挟まれないように華麗にかつ目にもとまらぬスピードでステップを踏むダンスである。[7] 日本の幼稚園、保育所においてどのぐらい教材としてまた遊びとして普及しているかは不明であるが、比較的良く知られたダンスと思われる。

実際に、バンブーダンスの教材研究においては資料が少なく筆者が調べたところでは小学校の教材としての研究が 2 件であった。舛田 [8] によると、鳥になりきっている姿やフィリピンの人たちへの憧れや尊敬の気持ちをもって学習できた。児童同士の学び合いができた。基本ステップに時間がかかり創作まで至らなかったという調査報告をしている。

筆者の予備調査における報告 [9] では、バンブーダンスの教育的効果について下記の項目を報告した。それは、①リズム運動を行う土台としての効果。②協調性を養うことができる。③チャレンジ精神を養う。④肌の触れ合いによるコミュニケ―ションの土台を培う。⑤創造性を養う。⑥比較的克服しやすい。⑦段階を踏んだ過程を示すことができる。という 7 項目

があげられた。

バンブーダンスは、日本でもよく知られたダンスであり、小学校などの教育現場においてもよく使われている。しかし保育士養成の学習プログラムとして効果があるかは先行研究の少なさから不明な点が多い。また独特の動きや親しみやすいリズムであることに加えて、動きに自由度があることから創造的な養成校のプログラムとしても幼児期の子どもにおいても有効であると考え、バンブーダンスを教材として採用した。

5. 授業の方法と概要

授業の目的：グループでリズム運動遊びを楽しむ。グループでダンスを創作する楽しさを味わう。下肢によるリズム運動遊びを通して身体全体のリズム感を養う。竹を持つ人と踊る人に分かれて行い協調性を養う。グループ活動での一体感を味わう。子どもへの指導を想定しプログラムの過程での心の変化を知る。ということを目的として授業を行った。

授業概要：表 1 は、本論で検討される授業計画を示したものである。

表 1　単元計画

時	1	2	3	4	5
場所	教室	体育館	体育館	体育館	体育館
形式	講義 グループワーク	実技 グループワーク	実技 グループワーク	実技 グループワーク	実技 課題発表会
内容	バンブーダンスの説明（ビデオ上映）と授業概要の説明。 学習者グループ分け	実技①　3 拍子でゆっくりのリズムの練習。 実技②　3 拍子での速いリズムの練習。 実技③　4 拍子の練習。 GW①　創作のための曲選びおよび振付のためのパート選択	実技①　3 拍子でゆっくりのリズムの練習。 実技②　3 拍子での速いリズムの練習。 実技③　4 拍子の練習。 GW②と実技④振付のためのパート選択と練習	実技①　3 拍子でゆっくりのリズムの練習。 実技②　3 拍子での速いリズムの練習。 実技③　4 拍子の練習。 GW③と実技④発表に向けての練習	実技①発表に向けての練習 課題発表会

1）曲とリズムについて

バンブーダンスの 3 拍子での基本の動きを練習した。初めに 3 拍子でのゆっくりとしたリズム（約　♩=120　）での練習から速いリズム（約　♩=180）での練習を行った。

グループでの創作することを前提として 4 拍子の曲（約 ♩=158）での練習も行った。これは、3 拍子よりも 4 拍子の曲のほうが学生の意欲をかきたてるものが多く、動きも多様にすることが容易であるために採用した。

２）学習シートおよび発表のための振付パートシートの活用

表 2 は毎回授業における学習シートである。学生各自が自分の課題や重視した点、発表に向けての感想、発表を終えての感想を記述した。

表 3 はグループでの振付の場所や内容を記入するシートとして第 2 回目 3 回目の授業で主に活用した。グループごとに記入した。

表 2　学習シート

バンブーダンス学習シート

クラス	学籍番号	名前

① 月 日 限

３拍子 遅いテンポ	３拍子 速いテンポ	４拍子 恋
できる できない	できる できない	できる できない

やりやすい拍子は３拍子　４拍子 ○を付ける。

ノリやすい曲は　イルカはさんぷらこ　テニクリン　恋　その他（　　）

順位を付ける→　（　位）　（　位）　（　位）　（　位）

選曲について　グループで決めた曲は　曲を選んだ理由

題名	歌手	理由

② 月 日 限

３拍子 遅いテンポ	３拍子 速いテンポ	４拍子 恋	発表曲
できる できない	できる できない	できる できない	できる できない

振付の創作について(例紙)

創作ダンスであなたが重視した点

③ 月 日 限 【発表に向けて】

３拍子 遅いテンポ	３拍子 速いテンポ	４拍子	発表曲
できる できない	できる できない	できる できない	できる できない

発表に向けて表を付けた点

④ 月 日 限 【発表を終えて】

発表を終えての感想

表 3　振付パートシート

バンブーダンス 創作活動

メンバー

代表（2ー　）	曲 準備 操作	振付	演出

	振付 メンバー ステップ 演出 など
イントロ	

３）学生グループについて

T 短期大学はクラス制で授業が行われている。2 年生ということもあり、グループ分けについては、学生主体で 10 名前後を 1 グループとして各クラス 4 グループで活動を行った。

４）教材の素材と種類について

Ⓐバンブーダンスに用いる竹は、長さ約 3m～4m を使用した。また土台として竹を半分に切ったものを下に敷いて行った。4 組分使用可能。

Ⓑポリエチレン製のスポンジ長さ約 120cm も使用した。40 組分使用可能。

Ⓐ竹を使う場合は、同時に 3 人から 4 人ぐらいまでの練習が可能であるが Ⓑは短いため 1 人ないし 2 人程度しか練習できない。しかし素材化が軽く持ち手が一人でも操作可能であること、あたっても痛くないこと、そのために恐怖心が少ないことが利点である。Ⓑはグループ練習の動作確認などに使用している姿が時折見られた。

５）授業における指導の実際

バンブーダンスについての基本の動きとして、教材の Ⓐ Ⓑ それぞれ任意の棒を床に間を開けて置き（両足が入る程度の間隔）「(中に)　右足　左足」「(外に)　右足」「(中に)　左足　右足」「(外に)　左足」と掛け声をかけて練習した後、持ち手を使って竹を動かす動きを入れた方法をとった。幼児への指導の場合における筆者の経験からも棒に挟まれる恐怖を持たさないこと、リズム感をつかむまではより簡単な方法で行うことを優先して実践していることからこの方法で行った。

その後、持ち手をつけて 3 拍子での遅い曲から速い曲へテンポアップしていった。

4 拍子についても掛け声のみで足運びを確認したあとで、持ち手の動きを付けての練習ののち、曲をかけて練習した。

応用編の動きとして、3 人で中にはいって肩を組んで 5 往復する。2 人で円を描く動きをする。また持ち手とリズムを崩さず変わるという動きを確認し創作に向けてのヒントとしての練習も行った。

6.　結果と考察

１)学習シートの記述における 3 拍子と 4 拍子のリズムについての自己評価では「できる・できない」の 2 択にて記述をした結果は表 4 のようになった。

表 4　学習シートの結果①

実技　第 1 回目　(n=85)	できる	できない	未記入
3 拍子の遅い曲（♩=120）	83 名（97.6%）	1 名（1.2%）	1 名(1.2%)
3 拍子の速い曲（♩=180）	62 名（72.9%）	23 名（27%）	0 名（0%）
4 拍子の曲（♩=158）	82 名（96.5%）	3 名（3.5%）	0 名（0%）

3 拍子の曲については、速い曲と遅い曲の 2 曲を練習したが 3 拍子の速い曲は「できないと」記述している学生が 27%と目立つ結果となった。特にこのことについては仮説を立てたり予想をしたりしていなかったが、約 4 分の 1 の学生ができないと答えている。

また 4 拍子の曲については 96%の学生が「できた」と答えていることから、4 拍子の曲のほうが導入としては向いている可能性があり今後の授業研究の課題として考える必要がある。さらに創作において、ダンスする曲を各グループで選曲したが 3 拍子の曲を選ぶグループはなかった。このことからも 4 拍子の曲はなじみやすくリズムにのり易いと思われる。

第 2 回目以降の結果については、3 拍子の速い曲について「できない」と答えた学生は 3 名で、うち 2 名は 3 回目も「できない」と記述している。ただし 4 拍子の曲については 3 名とも「できた」と記述していた。

さらに、3 拍子と 4 拍子のステップの違いは、竹の外に足を踏み出した時である。3 拍子は、1 回で切り返しを行い体重移動をしなければならないのに対して、4 拍子はその場で片足ジャンプを 2 回することによりすぐに切り返しを行わなくてもよいため、持久力の点においても 4 拍子の曲のほうが行いやすいと思われる。

子どもの運動能力を考えたとき、さまざまな動きを取り入れることが望ましいが、バンブーダンスのステップにおいては3拍子と4拍子の両方を行うことが動きの単調化を防ぐためにも良いと考えられる。

これらのことについてビデオ撮影した映像を確認すると、確かに 3 名は 3 拍子の遅い曲についてもダンスを長く続けることが難しい印象であったが、表情は特に暗い感じは受けなかった。

その中の A さんは、一往復できると両手を挙げて笑顔でグループの仲間にできたことをアピールするようなしぐさを見せていた。

また、B さんは、「できない」と記述しているがビデオ撮影で確認するとしっかりとステップを踏んでダンスを行っている様子が見られた。

C さんについては、1 回目の授業で 3 拍子、4 拍子ともに竹をもっている姿は確認できたがダンスしている姿は確認できなかった。しかし彼女はスポーツのサークルに所属しており、体育など実技を伴う授業においても活動的でありできないと思われる要素は少ないと考えられる。また振付パートシートの振付担当者の欄には C さんの名前がありビデオ撮影を確認しても発表の際はしっかりダンスができていた。このグループは、竹を使ってほかグループにない動きも入れて披露している姿が印象的であった。これらのことからも C さんがなぜ「できない」と記述したかは不明である。

AB の 2 人が「できない」と記述したのはグループのほかの学生と比べてそう思ったということでそのように記述したとも考えられる。

ビデオ撮影での表情や授業への参加状況から少なくともバンブーダンスを持ち手の役割も含めて楽しんでいる様子は確認できた。

２）発表を終えての感想についての記述

事例①　グループ I の記述（抜粋）

グループ I　メンバー12 名

学生 A	本番つまずいてしまい 悔しかった 。でもチームワークは最高だったと思う、ほ

	かのグループもいろんな案があって面白かった
学生 B	もっとグループ全体で出るところを作ればよかったグループの中で区切りすぎた。棒を上手に使えたらよかった けど楽しかった 。
学生 C	練習の時でできたことを間違えて 悔しかった 。案を出したり協力したりして楽しくできてよかった。
学生 D	練習はたくさんしたけど 本番では間違えてしまいました 、案をみんなで出し合って一つの作品を作りあげることができてよかったです。
学生 E	あまりいつも一緒にいない人たちばかりでうまくかかわっていけるか不安だったけど、皆の協調性がすごくあったし私もついていこうと思って頑張ってやっていたのでうまくできました。竹を動かしながら交代するとき声かけをしながらしたりグループにわけて練習し、合わせてみるとうまくつながらなかったときは調整したり、 協力することの楽しさを感じました 。
学生 F	練習の最後はうまくいったけどみんなの前になると少しグダグダになってしまった。 もう一回やりたかったです 。ほかのみんなすごかったです。

このグループの発表時のビデオ撮影を確認しても本番でそろっていなかった場面が確認された。しかし練習においてこのグループは授業者からみてもよく練習している印象がある。それは竹を使った練習の横でスポンジを使ったパート練習を並行して行っている様子と授業時間前（休み時間）に道具を用意して練習している姿を確認している。

学生たちにたくさん練習をした実感があるため、本番での失敗と思われる演技が悔しさとして表現されたと考えられる。

今回の研究の目的としてこの学習が「①学習過程において情緒面と社会性が培われるものであり、運動遊びが子どもの身体面のみの発達にとらわれるものではないことの理解ができること。すなわちプログラムの過程や終了時において運動技術の達成度だけではなくそのほかの面において気づきがありそのことを子どもへ提供するときに重要な要点として考えられること。」としている。

事例グループ①の記述では「悔しさ」を感じながらも楽しく学習に取り組んだ様子ともう一度やってみたいとの記述がある。また学生 E の記述から社会性が培われる要素も多分に含まれると考えられる。

子どもへの指導場面において、自分が悔しかった思いや協力する楽しさを実感できたことを記述し記憶に残せたことは意味のあること考える。

さらに学生 F の「ほかのみんなすごかったです」の記述からも自分たちのグループだけではなくほかのグループを認めることができることも目的に沿うと思われる。

事例②　グループⅡの記述（抜粋）

グループⅡメンバー11 名

学生 G	放課後みんなで集まって練習しました。そのため本番では 笑顔で楽しくかつしっかりできてうれしかったです 。・・・・これを機会に仲良くなれました。
学生 H	放課後にみんなで集まり発表のために練習しました。・・・ やってる時に自然に笑顔になれた しメンバーのみんなとも仲良くなれてよかったです。みんなで力を合わせる 大変さと楽しさを味わうことができました 。
学生 I	（授業）以外の時間にも練習して、今日発表を成功させて良かった。
学生 J	みんなで集まって練習して自分たちの オリジナルバンブーができたのがうれしかった 。ほかのグループの作品も自分では思いつかなかった動きがあり楽しんでみることができました。
学生 K	自然と笑顔がこぼれて楽しかったです 。・・・ リズムに合わせてダンスする楽しさ 、みんなで息があった時の 達成感を感じました 。

このグループ以外の記述にも大変多い記述であったが、「うれしかった」「たのしかった」「笑顔（でできた）」との記述である。本研究の目的③として「学生自身がプログラムを楽しみながら（遊びながら）学習できること」としているがこの学習でのポイントとして失敗したときにも笑顔ができることであると思われる。竹を踏みそうになったり、挟まれたりした時も体に感じる恐怖や痛みはあるものの笑って過ごせる範囲でありまたそのことが振付の失敗時についても悲壮感がなくもっと練習したいと思わせることができるのだと思われる。実際にこのグループは授業時間以外（放課後）に集まって練習しており保育においてもそのことは遊びのプログラムを提供する保育者として教材選びの一つのポイントでもあると考える。

学生 K の記述から他のダンスとは違ったリズム遊びとしての魅力がバンブーダンスにはあると思われる。

事例③　そのほかの記述について

学生 L	ステージ前の練習が 1 回どのグループもできたらやりやすかった。（3 拍子の遅い曲）は 3 回目以降の練習はいらないと思った。

練習時の問題として、この学生のように 3 拍子の遅いリズムは全体では練習しないでも良いと考えている学生が口頭ではあるが授業者に伝えに来ている。

ほぼ全員ができるダンスについては全体練習を検討する必要がある。

事例④　そのほかの記述について

学生 M	バンブーダンスの振付はやっぱり難しかったですが、自分がリズム感覚をとれることがわかりました。

短大 2 年生の学生 M の記述であるが、この学生は運動遊びやスポーツ、ダンスなどが特別得意な学生ではない。しかし今回自分のリズム感覚についてこれまでとは違う一面を発見している。これはこの学生にとって大きな意味を持つと思われる。生涯スポーツとしても幼児教育の現場保育者としても苦手意識を持たないことは大切な要素であるためバンブーダンスが意味のある学習プログラムであることが分かった。

7. まとめと課題

これは次回からの授業課題でもあるが、4 グループの学生が体育館でそれぞれ音源を持ち寄って流す音と竹でリズムをとる音によりリズムを自分のグループの音源を聴きにくいという問題があった。こちらも記述はされておらず仕方がないようにとらえている学生が多いと思われた。

バンブーダンスの竹は素材の持つ独特な音が魅力でもあるが、グループでの練習時はスポンジ製のものを使用したり、竹の下に敷物を敷いたりして大きな音が出ないような工夫をする必要がある。

今回の研究において、創作活動を伴うバンブーダンスの授業においてその学習過程では、身体面だけではなく情緒面や社会性を培うことが分かった。また学習者が楽しみながら学習できることは明確になり特に失敗やミスをした場面で顕著であった。

しかし実際の子どもの遊びとしてどの程度有効であるかは、不明な部分が多い。

保育者養成において学生が運動を好きになることや苦手意識を克服することは現場に出たときに非常に大切な要素である。このことからも創作活動を伴うバンブーダンスの教材は学習プログラムとしても有効であると思われるが、実際の子どもたちへの指導の場面の研究は今後の課題である。さらに体力低下に歯止めをかけられるようなアプローチになっているかどうかという検証も今後の課題として考えたい。

引用文献

１）森司朗　（2010）2008 年の全国調査から見た幼児の運動能力、体育の科学　60（1）
２）杉原隆、森司朗、吉田伊津美（2004）幼児運動能力発達の年推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造分析、平成 14～15 年度文部科学省科学研究費補助金（基礎研究 B）研究成果報告書（研究課題 14380013）
３）杉原隆、吉田伊津美、森司朗、筒井清次郎、鈴木康弘、中本浩揮、近藤充夫（2010）幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係、体育の科学　60（5）341-347
４）吉田伊津美、杉原隆、森司朗、（2007）幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動

指導の実際、東京学芸大学紀要総合教育科系、58,75-80
５）吉田伊津美、岩崎洋子（2012）幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識：国公立幼稚園と私立幼稚園との比較　東京学芸大学紀要総合教育科系、63（1）107-113
６）前橋明（2017）幼児体育　理論編　大学教育出版　p11
７）木下昭（2004）「民族ダンスの創造と国民国家フィリピンの形成」言語文化研究第 15 巻 4 号
８）舛田祐子（2006）「児童の学ぶ意欲を高める授業づくりー小学校 2 年「バンブーダンスでわくわくリズム」の事例をもとにー」日本学校音楽教育実践学会紀要 第 10 巻 2006 年
９）大森宏一（2015）保育内容表現におけるバンブーダンスの教育的効果に関する一考察日本教育実践学会第１８回大会　（於：上越教育大学）